中等教育コース（教職科目）教育の課程と方法

よりよい学校での学びとは？を問い続けられるために

教育臨床講座・藤原　一弘

１．授業の基本情報

本授業は、中等教育コース（教職科目）に設置された授業で、教員免許状取得の必須科目である。今年度の受講生は、中等教育コースに所属する３回生４３名、当該教員免許を取得希望の教職大学院１回生１名の計４４名であった。

本授業では、日本の学校教育に関してその構造となる教育課程やカリキュラムについて、様々な視点を提供することで受講者同士が議論を深め、学校教育の在り方について理解するだけでなく、よりよい学びのカタチについて思考を深めていけるように配慮しながら、授業を組み立てた。また、授業の後半には、教育を指導方法や授業デザインの面からアプローチしつつ、Society5.0 時代を迎える学校教育での教育方法についても考えを深められるように設定した。それらを通して、新しい学習指導要領が全面実施を迎える中で教員を目指す学生にとって、「主体的・対話的で深い学び」や「社会に開かれた教育課程」を踏まえた授業づくりに必要な知識や技術を身に付け、変化の激しい社会の中で未来を創造していく子どもたちを教える教育の在り方を問い続けられる資質や能力の素地を養うことを意識して授業を行った。

実際の授業では、はじめに『「学校や学級」という枠組みは絶対なのか？』という問いかけを行い、受講者が学んできた現在の日本における一般的な学校教育の在り方が、西洋において近代産業革命時にその社会的要請から誕生し、日本には明治時代に取り入れられた歴史的経緯について触れながら、一斉指導・講義形式の授業スタイルの良さと限界について考えることで、教育の在り方や学びのカタチが一律ではないことを意識させた。その後、①日本のナショナルカリキュラムである、学習指導要領の変遷や内容の変化、②諸外国の教育課程やカリキュラムの在り方、③教科学習や教科外学習の枠組みとその内容や特質など、多角的な視点からよりよい学びのカタチを議論し、創造していけるようにし、グループワークを多く取り入れて自分の考えを深められるように構成した。

後半は、教育方法の在り方から新しい学びのカタチを創造することを意識して、①ICT 教育の今とこれから、②授業デザインの手法と評価、③思考力や表現力を高める指導方法の工夫などについて、実践事例を紹介したり、体験的に学んだりできるようにした。

以上の講義を受講した後、本授業のまとめとして、受講者自身が取得を目指している教員免許状の教科における学習指導案を作成し、その授業構想を互いに説明することを課題とした。これは授業終了後に附属校園で教育実習を行うことを踏まえて、より実践を意識して受講できるようにするためであった。

授業全体を通して、受講者は精力的・意欲的に授業に参加し、意識の変容や成長が多く見られた。

２．授業評価・授業研究の内容

①授業評価について

講義の最後に DP との対応関係の調査を行った。受講生のうち３３名の回答となったが、その結果を（表 1～4）に示す。

（表１）　DP との対応関係のアンケート結果

知識・理解：教育と教職に関する確かな知識と，得意とする分野の専門的知識を修得している。	
とてもそう思う	２２人
ある程度そう思う	１０人
あまりそう思わない	１人
授業の内容・目標がこの DP とは無関係である	０人

（表２）　DP との対応関係のアンケート結果

技能：教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている。	
とてもそう思う	１４人
ある程度そう思う	１７人
あまりそう思わない	２人
授業の内容・目標がこの DP とは無関係である	０人

（表３）　DP との対応関係のアンケート結果

思考・判断・表現：教育現場で生じているさまざまな現代的諸課題について，専門的な知見をもとに，その対応方策を理論に基づいて総合的に考え，その過程や結果を適切に表現することができる。	
とてもそう思う	１７人
ある程度そう思う	１３人
あまりそう思わない	３人
授業の内容・目標がこの DP とは無関係である	０人

（表４）　DP との対応関係のアンケート結果

興味・関心・意欲，態度：教師としての使命感や責任感を持ち，自己の課題を明確にして理論と実践とを結びつけた主体的な学習ができ，自主的に社会に貢献しようとする。	
とてもそう思う	１８人
ある程度そう思う	１３人
あまりそう思わない	２人
授業の内容・目標がこの DP とは無関係である	０人

上記結果から、どの項目においても、概ね学生にとって学びのある授業であったと分析する。多角的で多様な視点で議論することを多く取り入れることで、知識や理論の伝達になりがちな教育課程やカリキュラムに関する講義を改善することができていたのではないかと考えている。また、指導者自身が現場の小中学校教員、教育委員会指導主事としての経験があるため、それを活かし、なるべく多く現場の実践事例や授業方法などを紹介したため、リアリティを持って授業に参画できていた。教員を目指す学生が最も不安視し、知りたいと感じているのは現実の学校現場の生の声であり、それを実際に伝えることができる立場であるため、学生もある程度、意欲的に受講できたのではないかと考える。

このことは、毎回の授業後に記述したリフレクションシート（感想）にも以下のように主体的に学び取ることの重要性を意識する記述が多く見られた。「今回は『学習環境と協働的な学び』ということで、授業形態や指導形態を学びました。全員参加の授業の５原則の中に③待つというものがありました。これは実際に授業を見ると重要性を強く感じました。特に道徳の授業の中で、生徒が一生懸命「自己内対話」をしている時間は大切な時間です。問いを出して反応がないと不安になってしまうのも分かりますが、しっかりと“待つ”ことも大切にしていかなければならないと改めて思いました。また、有効な学習形態・指導形態は何なのか、しっかり考えていきたいです。」、「『どうやったら生徒の理解が深まるか』ということは授業を考えるときに誰もが悩むところであるが、『自分ならどうか』と考えることで案外答えが出たりするときもある。人に教える（アウトプット）ということは難しいことだなあと思うようになったのと同時にもっと知識を増やし、自分の中での理解を深めるよう努力している。知識を増やすために行動を起こし、目的を持って取り組んでいきたい。」

一方で、「あまりそう思わない」と回答した学生も若干名いた。様々な視点から教育課程やカリキュラム、教育方法を考えることを中心に授業を組み立てたが、情報提供が多すぎてじっくり考える時間が短かったことが原因の一つであると考える。もう少し１つ１つの事象やポイントについて丁寧に説明し、考えを深めて語らせる場面があるほうが、知識の理解も深まり、学生自身の達成感や充実感につながったかもしれない。次年度以降、改善をしていきたい。

②授業研究の内容について

実践的な授業内容を意識して取り組んだ点について、以下に紹介する。

一点目は、現在行われている教育の現状を体験的に学ぶ機会を創ったことである。新しい学習指導要領では、ICT を活用した授業づくりの重要性が明記されており、児童生徒が主体的で対話的な学びを進めていく上で、今後ますます大切になってくる教育方法である。また、文部科学省は１人１台の学習用端末と高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備する「GIGA スクール構想」を打ち出した。教育課程やカリキュラム、教育方法の面も今後急速に変化していくことが予想される中、ICT を活用した授業づくりや授業デザイン、カリキュラムの在り方を考えていく時間を設けることができたのは、非常に効果的であった。

実際には、指導者が以前勤めていた松山市教育委員会と連携し、松山市教育研修センタ

一事務所において、ICT 関連の担当指導主事から、直接 ICT 教育の現状や実践の取組について説明していただき、センター内にあるタブレットパソコンを使って、授業づくりのポイントや視点を体験的に学ぶ授業を行った（写真１～３）。

大学においてもプログラミング教育や他の指導法の授業などで ICT を活用した授業について考えたり、講義を受けたりする授業もあるが、本授業ではカリキュラムや教育課程の中に位置づける ICT 教育という視点を踏まえた講義をお願いしていたため、全体の学校カリキュラムの中で、どのように位置づけることができるかを考えながら学ぶことができていた。

（写真１）教育研修センター指導主事の講義

（写真２）ICT を使って授業づくり体験

（写真３）考えた指導プランの相互発表

二点目は、学習指導案の作成と授業案の説明会の時間を設けたことである。学習指導案は、授業のまとめとして作成するようにし、それまでの授業で学んだことを活かすように指導した。つまり、学校教育において「教育課程やカリキュラムの中での教科」ということを意識して、やってみたい授業を構想することとした。本授業は中学校・高等学校教員を志望する学生が受講している。小学校に比べ、中学校や高等学校では教科至上主義とも思えるほどその意識が根強く残っており、教科間のつながりや連携、融合に批判的な旧態依然とした教育の在り方が残っている。新しい学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」がキーワードとして挙げられており、教科間の往還や連携、教科と教科以外の学びの連携が重要視されている。本授業では、そのような変化の流れも理解した上で単元を構想し、学習指導案として完成させることを課題とした。指導案の形式は、直後に控える教育実習を想定して、附属中学校で実習生が用いている様式を使って作成した。そうすることで、指導案の書き方についても学ぶ意識を高く持って取り組めたようであった。

指導案は作成して提出するだけにせず、授業説明や模擬授業を行う時間を取った。グループに分かれて１人２０分程度の時間を使い、導入や展開で工夫したポイントや中心発問、題材設定の理由などを説明し合うことで、互いに刺激を受けながら、よりよい授業の在り方について理解を深めていく様子が見てとれた。

３．地域社会を核とした教育と研究の繋がり

学校教育は地域社会の中に位置づくものであり、地域を学びの素材・フィールドとしてカリキュラムをデザインしていくことは必須である。そのことを授業内でも意識して伝えた。また愛媛県内の小中学校教員、教育委員会指導主事であった経験を活かし、愛媛県内の現場の取組や実践、指導方法なども数多く紹介した。愛媛教育の質の高さを学生に還元することにもつながっており、地域の良さを感じながら、愛媛で教師になりたいと思わせる効果も出ているように思う。

次年度は、現場教員にゲスト講師として来てもらうなど、より実践的で地域に密着した授業の構築を目指して改善していきたい。